令和５年度　幼児教育研修（資質向上　加藤ゼミ　第４回）
「心の育ちと対話する保育実践」
日時：令和６年１月２２日（月）１５：００～１７：００
会場：足立区梅田地域学習センター
講師：山梨大学　　名誉教授　加藤　繁美　氏

全4回の加藤ゼミ最終回では、これまでの学びを意識しながら活発なグループ討議が行われました。

保育実践記録は『対話する保育』の必須アイテム

子どもの声に正当に耳を傾けることが大切

- **事実の中にある真実を読み取る**
- **自分が保育の中で大切にしていることを書く**
- **記録を理論で分析し、意味づける**

心を動かされた事実を記録し、語り合い、分析する

実践記録１

『せんせい!!オレンジいなくなっちゃった』（1・2歳児）
～子どもの表現や発想はおもしろい～

とてもきれいなオレンジ色の夕日に気づき、
窓の外の夕日を指差しながら
A　「せんせ、せんせ!!」（窓の外の夕日を指差す）
保　「きれいだね～」
子どもたち「わぁ～!」「きれい!」
テラスに出て何人かで夕日を見る。

保　「あのお空は何色だろうね?」
B　「オレンジ!」
保　「きれいなオレンジ色だね」
子どもたち「なんで～?なんで～?」
保　「なんでだろうね?」
C　「寒いから電気がついたの」
保　「そっか!電気がついたんだね」
少しの間、夕日を見てから保育室に戻る。

しばらくして、Bが焦ったような声で保育者を呼ぶ。
B　「せんせい!!オレンジがいなくなっちゃった」
保　「本当だ!どこに行っちゃったの?」
他の子たちも窓際に集まり、色が薄くなった空を見る。

C　「木の後ろに行っちゃったの」
保　「木の後ろに行っちゃったのか」
D　「あっち（マンション）の方に行っちゃったの」
保　「あっちの方に行っちゃったんだ」

A　「せんせ、せんせ」
少しだけオレンジ色が残る空を指差して保育者を呼ぶ。
保　「さっきよりオレンジ色が薄くなったね」
A　「ん…（空をじっと見つめ）　せんせ、せんせ」
保　「またオレンジ色が薄くなって、少し黄色くなってるね」

分析のポイント

保育者の言葉が、
子どもの言葉以上を語っていない

意味づけ
➡保育者の言葉に影響されず、子どものイメージが広がっていく

「せんせ」しか言っていないが、
Aの思いが保育者に伝わっている

意味づけ
➡Aと保育者の間に共同注視が存在している

一緒にモノを見るなどの方法で、同時に同じものに関心を向けること

実践記録 2

『不思議な氷』（3歳児）

～考える子どものそばには考える子どもがいる～

園庭のままごとテーブルの溝に、氷が張っていることに気づいた子どもたち。

集まった数人が、氷の中に気泡ができていることや石が入ったまま凍っていることを発見し、
「これ、しゃぼん玉みたい」「この石、取れない」と話している。

しばらくして、みんなで氷を割ろうということになる。
割れた氷を大事そうにそれぞれの手のひらに乗せたり、器に入れたりする。

A「氷ってあったかい所に置くと溶けるんだよ」
と、氷が入った自分の皿を日なたに置いた。
少しずつ溶けてなくなっていく氷をみんなで見ていると
B「氷、どこ行っちゃったの？」
と、不思議そうに尋ねるが誰も答えない。

分析のポイント

意味づけ

➡子どもは集団的思考をする
（集団的語り合い）

モノとモノの関係や因果関係を考えるようになるが、まだ**主観的思考**で**自分なりの理論**を作る段階である。

「どこにいっちゃったのかな？」という問いを、子どもたちは**平行的に聞きながら、自ら思考している。**
保育者は、つい答えを教えたくなったり、何か言いたくなったりするが、**子どもたちの言葉で納得する理由を見つけることが大切**である。

最後に…

壁にぶつかった時に理論が役に立つ

子どもの言動に対して…

『保育者が出しゃばらない関わりをする』

子どもとの間にあるズレを保育者は我慢できず、先走って教えたくなったり、何かを言いたくなったりすることが多い。子どもと大人の常識は違うことを認識し、**結論がどこにあっても子どもたちが考え、決めていく**ことに意味がある。

子どもたちがつくる
世界に共感する
世界を応援する
世界を信じる!!

実践記録を通して…

『保育の本質はどこにあるのか、理論で分析する』

記録は保育を振り返るだけでなく、言語化して他者に聞いてもらうことで、改めて**自分で自分の保育を問う**ことにつながる。
また、他者の事例を通して、**今までの自分の常識にはない新しい発見や学び**を得て、自分の保育を振り返ることができる。

自分たちの実践を自分たちで分析することに意味がある。

研修生の報告書より

心が動く場面を意識しながら保育してみるといろいろな発見があり、自分の保育を見直すきっかけとなった。対話する保育を心がけ、子どもたちの本当の気持ちや訴えに気付ける保育をしていきたい。

子どもたちが楽しんでいる世界を見守り、自分の心に響いたところを記録に取ることで、子どもたちの気持ちの変化や成長に気づくことができた。